

マザーテレサに見る「新しい人」の人間らしさ —本学「人間学」教育の目標の一考察—

小林 宏子

東日本大震災からの復興は遅々として進まず、政治、経済ともに混迷を続ける日本社会では先の見えない闇からの脱出を求める衝動が、人々をして種々のイノベーションに駆り立てている。また、次々と現れる技術革新の成果は、「新しさ」が正当性の根拠であるかのような雰囲気を作っている。しかし、新しいという理由で好まれるものが、歴史がすでに「非人間的」という判断を下した状態へ社会を後退させることはないのだろうか。執筆者はすでに前号でマザーテレサの現代的意義を考察し、人間観の中に「神との関係」という宗教的視点を回復し、人間の尊厳における霊的根拠を考慮することを提案した。今回は更に、宗教的次元の「新しい人」の姿をマザーテレサにおいて考察し、神の創造の働きを受けて変容される「People for Others, with Others」の姿について論じる。それは同時に、執筆者の「人間学」教育が目指す「人間らしさ」でもある。

1. はじめに

2012年10月「iPS細胞」を開発した京都大学の山中伸弥教授がノーベル医学生理学賞を受賞し、その快挙を日本中が喜び称えた。現代は、先端科学技術の革新が遺伝子操作という生命の質を改変する介入を可能にする時代である。新自由主義的市場はすでに再生医療、不妊治療、育児、スポーツ、美容整形など様々な分野で人間の身体的増強のためのビジネスを拡張させている¹。しかもそうした技術革新を利用することを礼賛し、人間という種の改変にもつながる新しいタイプの優生学を歓迎する人々も存在するという²。ところが、公共倫理規範の策定はこの技術革新のスピードに追いつかない状況にあり、人間の生命と尊厳に関わる重要な選択が、考えるための指標を与えられることなく個々人の責任に委ねられたままである³。そのため、各選択の結果として被ることになる身体的・精神的・心理的ストレスによるダメージも、自己責任の名の下で個人が背負わなければならない状態に

1. マイケル・J・サンデル著／林芳紀・伊吹友秀訳『完全な人間を目指さなくてもよい理由—遺伝子操作とエンハンスメントの倫理—』（ナカニシ出版、2010）63-64頁、及び香山リカ『「悩み」の正体』（岩波新書、2007）96頁参照。
2. サンデル、前掲書、73-83、103-104頁参照。
3. 朝日新聞朝刊「命めぐる技術どう付き合う—出生前診断 iPS細胞—」（高久潤、2012／11／5）参照。

ある⁴。その結果、社会全体に蔓延する不安や苦悩を解決する手段として、今度はスピリチュアルの名の下で開催される各種自己啓発セミナーや、占星術や霊能者によるカウンセリングという新たなビジネスが生まれている⁵。

このような市場経済が専横を極めてこの社会の行く手に待ち受けているものは、果たしていかなる「新しい」世界なのだろうか。その世界で生き残れる人間と言え、ごく少数の富者、強者、勝者だけであることが予想されているにもかかわらず、否応なく、皆がその競争に参加させられている。ところが、新しい時代で生き残る人間となるための教育的圧力が強まるにつれて、若者たちは心の奥底に空虚感を抱え、人間として生きていくための希望を失っていくように見える⁶。

一方、カトリック教会は現代の文化思潮に対して「ニューエイジ」運動の蔓延を確認し警告する⁷。「ニューエイジ」(新しい時代)という呼び名は、二千年間続いた魚座(キリスト教)の時代の後に、水瓶座アクエリアス(宗教に代わる新しい霊性)の時代が訪れると考える占星学の思想に由来する⁸。また、この運動に属するとされる活動や団体組織は「宗教・哲学・心理学・教育・芸術・エコロジー・自然・科学・医療・平和運動・フェミニズム運動」と広範な分野に及ぶ⁹。

カトリック教会教導職が危惧するのは、それらが新しさの衣を纏って登場してはいても、古代からキリスト教が闘わざるを得なかった反キリスト教的グノーシス主義やエゾテリズム(秘教主義)に通じる特徴を備えている点である¹⁰。その多くが、人々を個人主義的自己完成の目標に集中させることで、超越的他者である人格神を否定し、社会的弱者との連帯性を閉ざす方向に進ませる危険を含んでいる¹¹。キリスト教的視点からはその世界観や人間観が、結果として世界を非人間化し個人を無力化しかねないゆえに、警戒するのである¹²。

ところが、これらの思想はすでに日本でも非宗教的文化的活動の形で広まり、伝統的宗教の代替的地位を獲得している。宗教に無関心な人々が多い日本の現状を鑑みると、こうした思想を吟味するキリスト教の思想的伝統に則った本学の教育は社会的意義を持つと考える。ただし、その要求に答えつつ2年という期間で学生たちにこの教育的意義を理解させるこ

-
4. サンデル、前掲書、93頁、及び、2010年12月14日(火)放送「NHKクローズアップ現代『胎児エコー検査進歩の波紋 (NO.2980)』」http://cgi4.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail.cgi?content_id=2980 参照。
 5. 名越康文「生身の患者と仮面の医療者：一現代医療の統合不全症状について―[第4-5回スピリチュアル・ブーム(1)(2)]『週刊医学界新聞』、第2739号2007年7月9日、第2743号2007年8月6日 http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA02739_03 (2012年12月4日閲覧)
 6. 森一弘著『人が壊されていく―日本社会と人のありようを考える―』(女子パウロ会、2009) 30-33頁参照。
 7. 岩本潤一訳著『現代カトリシズムの公共性』(知泉書館、2012) 109-138頁、及び、教皇庁文化評議会／教皇庁諸宗教対話評議会「ニューエイジについてのキリスト教的考察」(カトリック中央協議会、2007、以下『考察』と記す) 参照。
 8. 岩本潤一、前掲書、112頁参照。
 9. 水草修治著『ニューエイジの罫』(CLC出版、2009) 13頁参照。岩本潤一、前掲書、113-115頁は、島園進氏が「ニューエイジの周辺」にある運動に分類する活動名を記している。
 10. 岩本、前掲書、124、126頁参照。
 11. 同上、128-131頁参照。
 12. 同上、129-130頁参照。

とは容易ではないが、それでも社会に巣立っていく学生たちが、自分たちを待ち構えている様々な罫の存在に対して自覚を促すことは必須の要件であると考えます。そこで、キリスト教ヒューマニズムにおける「人間らしさ」の特徴を、マザーテレサをモデルとして確認したい。

まず第一章では、現代社会が陥っている様々な非人間的要素を指摘し、克服、または回復すべき人間性の質を哲学的に考察する。第二章では、キリスト教的人間観における「新しい人」の意味を確認し、本学教育が目指す「超越」について考える。更に、第三章ではマザーテレサに見られる「新しい人」の姿を参考にし、本学人間学が目指す「人間らしさ」の特徴を論じる。

II. 本論

第一章 バイオテクノロジー時代に問われる「人間らしさ」

1. エンハンスメント技術が脅かす人間らしい態度と姿勢

出生前診断が妊婦に与える衝撃やその波紋の深刻さはすでに社会問題として認識されていた。しかし、今年も母親の血液を解析するだけで、胎児にダウン症などの染色体異常があるか否かが、99%の確率でわかる検査方法が確立されたため、それを一般的検査として導入すべきか否かについて議論する段階となった¹³。生物学技術の革新は目を見張るほどであり、健康回復を願う人にとっては歓迎されるべきことではあるが、そこには、これから生まれてくる生命の質を選別しようとする優生思想を承認し、人類全体の未来を一定方向へ決定づける重要な選択が伴っていることを自覚すべきであろう。

カトリック信仰に基づく本学の教育理念からすれば、胎児の中絶につながる倫理観やその根拠となる唯物論的人間観、無神論的生命観を容認することはできないが、特定の宗教的視点から独立した科学的学問研究のみを推奨する現代日本社会においては、倫理観の形成の根拠を神学に求める理論は受け入れられにくい。ところが、NHK番組「ハーバード白熱授業¹⁴」で有名になった政治哲学者マイケル・サンデルによれば、アメリカ合衆国の現実、最早、この神学と境界を接する領域の問題を避けては行かない段階に達していると言われる¹⁵。なぜなら、本来、疾病の治療のために開発された技術が、すでに医療の領域を超えて筋肉増強、

13. 2012年10月3日朝日新聞(朝刊)「新型出生前診断、年内に指針」他、日本産科婦人科学会 声明「新たな手法を用いた出生前遺伝学的検査について」http://www.jsog.or.jp/statement/statement-shussyouzenshindan_120901.html 及び同学会指針 http://www.jsog.or.jp/news/html/announce_20121217.html (2013年1月10日閲覧)

14. 番組放送は2010年であるが番組収録は2005年とある。マイケル・サンデル/NHK「ハーバード白熱教室」制作チーム小林正弥・杉田晶子訳「ハーバード白熱教室講義録+東大特別授業」(早川書房、2010)。

15. マイケル・サンデル著/林芳紀・伊吹友秀訳『完全な人間を目指さなくてもよい理由―遺伝子操作とエンハンスメントの倫理―』(ナカニシヤ出版、2010) 12頁参照。

記憶力強化、身長アップなどのいわゆる人間改良のための市場を抱えた成長産業の道具と化しているにもかかわらず、その技術を利用するか否かの選択が「消費者」としての一般市民に委ねられたままの状況にあるからである¹⁶。

訳者林芳紀の解題にもある通りサンデルは「我々がエンハンスメントの倫理に取り組むには、現代世界ではほとんど見失われてしまった問題、すなわち自然の道徳的地位や、所与の世界に向き合うさいの人間の適切な姿勢に関する問題へと、立ち帰る必要がある」と主張する¹⁷。実に、「より大きな危機に晒されているのは、(中略)重要な社会実践の中に体现されている人間らしい善の命運にかんする¹⁸」ものであり、人間が「住まう世界へと向けられたわれわれの態度や、われわれが渴望する自由の種類にかんする事柄¹⁹」だからである。つまり、エンハンスメント技術を利用して人間改良を図ることによる本当の脅威は、単なる倫理・道徳のレベルに留まる問題ではなく、従来、われわれが人間性と称してきた人間の本質的領域が改変されることにあると言える。熟慮すべきは、個々の行為における善悪の判断基準ではなく、人間らしい「心の習慣や人間の存在様式」が変質しようとしていることであり、「生命倫理の問題一般に立ち向かう際の姿勢や眼差しのあり方」についてである²⁰。

実は、この問題意識は本学の「人間学」教育が目指すところと共通する。つまり、本学の「人間学」は神学的人間論を土台にし、同時に科学的学問の成果を援用しつつ人間の生き方を探究する科目と位置付けられてきた²¹。その目的は、未来を建設する若者に対して宇宙の中で生きる「人間の位置と役割」との解明を試み、世界やその中で生きる自分自身と他者に向き合う際の人間らしい「姿勢や態度」を涵養させることにある²²。また、本稿が信仰者であり修道女であるマザーテレサを考察対象とする理由も、神に対する人間の「根本姿勢」や「謙遜な態度」、人々に対する「眼差しの在り方」に、キリスト教的人間観のモデルを見出すからである。バイオテクノロジーが消費者である一般人を引きつける魅力的商品を提供する市場を拡大し始めた今、執筆者は、霊性を含む人間論と理性的学問の両方に理解を示す人材育成と輩出の必要性を痛感している。しかし、まずはサンデルの言葉を引用しながら、哲学領域を出ずに主張し得る人間らしさの質について考察する。

2. 脅かされる人間存在の質としての被贈与性

訳者林芳紀の解題にもある通りサンデルは身体的増強や遺伝子操作の蔓延によって、人々

16. マイケル・サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由』、13頁参照。

17. 同上、12頁、訳者解題167頁。

18. 同上、101-102頁。

19. 同上、102頁。

20. 同上、101頁。及び、訳者林芳紀氏による解題176頁参照。

21. ハイメ・カスタンエダ／井上英治編『現代人間学』春秋社、2008、まえがきiii参照。

22. ハイメ・カスタンエダ＋井上英治編『新人間学』透土社、1993、まえがき4頁「20世紀に目立った科学・技術志向は、今後、大きく問い直されるべきなのであろう。そう思えば、今こそ私たちは、諸科学との対話を通して宇宙の中で生きる人間の位置と役割との解明を試みる人間学的な視点に立って、ものごとを真摯に観ることが問われているのであろう」。

から「生の被贈与性 (giftedness of life)」すなわち、「贈りものである生」という人間の本質的事柄の理解が失われる危険を指摘し、その保護を主張する²³。その理解とは、「われわれが自らの才能や能力の発達・行使のためにどれだけ労力を払ったとしても、それらは完全にはわれわれ自身の行いに由来してもいなければ、完全にわれわれ自身のものではありません」ということを承認することである²⁴。そして、もし、人々から「生の被贈与性」の理解が失われてしまえば、結果的には人間界から「所与の事柄や不測の事態を甘受する謙虚さや、『招かれざるものへの寛大さ』という性質も失われることになる」と語る²⁵。つまり、「子育ての場面からは無条件の愛や招かれざるものへの寛大さといった規範が失われ、スポーツや芸術の場であれば、生来の才能や天賦の才に対する祝福であり、さらには特権にさいしての謙虚さ、幸運から収穫された果実を諸々の社会的連帯の制度を通じて分け合おうとする意志など」が失われると主張する²⁶。

この被贈与性という表現が、贈り主の存在を想定する宗教的色彩を帯びるため説得力に欠けるという批判を予想した上で、サンデルは人間の存在様式の問題としての被贈与性を理解するためには必ずしも宗教的信念を前提にする必要はないと語る²⁷。なぜなら、人々がある人物の天賦の才と呼ばれる能力を評価し、当人がその才能に感謝する場合、必ずしもその才能の由来や起源に、神という存在を想定している訳ではなく、自然や幸運、偶然、家族といった本人自身以外の、むしろ、当人の制御の及ばない領域から受けた資質や力量であることを表明しているからである²⁸。正に、この「与えられた」という感性こそが、この世界には自分の支配と制御の及ばない領域があることを理解させ、その領域に対する姿勢や態度としての謙虚さを生み出し、すべてを自分の支配と制御の下に置こうとする性向には制限を設けるべきことを承認させる機能を果たすのである。

従って、親が望む遺伝子を選別して子どもを産もうとし、薬物や遺伝子操作という手段によってパフォーマンス向上を図ろうとすることには、自然や偶然によって与えられた所与のものを拒否し、一部の人間が理想として作り上げた完成体のイメージに向けて、際限なく、たとえ自らの性質であろうとも意のままに改変しようとするに通じる傲慢が潜んでいる²⁹。もちろん、個々人においては競争社会の中での成功を追求しようとする願望から生まれる無意識的な衝動であり、明確に「生の被贈与性」を否定した形の自己完成化に向けた人間改良を試みるという自覚はないであろう。しかし、こうした無自覚的に採用される遺伝子操作の新技術は、すでに新しい優生学を招来し、宇宙における人類の新しい地位の創出や向上を目

23. マイケル・サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由』、30-31 頁、及び訳者林芳紀解題 168-169 頁参照。

24. 同上、30 頁参照。

25. 同上、171 頁参照。

26. 同上、102 頁参照。

27. 同上、90 頁、170 頁参照。

28. 同上、98 頁、171 頁参照。

29. 同上、65-66 頁参照。

論む人々によって、未来の人類が備えるべき遺伝的特徴を特定し、選別する計画を実行しやすくするのである³⁰。

近現代は「贈られた自然な生」にまつわる種々の制約の不自由さから人間を解放し、自然を人間の支配下に置くための力を増強してきた時代である。しかし、今や人間の自由の拡大の願望は、人間の支配と制御の及ばない領域の存在を否定し、人間自身をも自由に操作し管理する願望へと移行し、それに魅了される人々を増加させている³¹。しかし、支配と制御の範囲を拡大し、自由選択の領域を増加させることは、同時に、以前には存在しなかった決定責任の拡大という構図にも巻き込まれることを覚悟すべきである³²。今こそ生の被贈与性という人間の本質と向き合い、真の人間的幸福とは何かを問い直すべきなのではないだろうか。

3. 脅かされる謙虚・責任・連帯という社会的徳性

サンデルは、エンハンスメントの採用が人間の徳という性向を弱め、個人ばかりではなく社会全体からも「謙虚・責任・連帯」といった人間的特徴を消失させることを問題視する³³。前項で明らかとなったように、問題の所在は、人間の生誕の神秘を支配し、他人を操作しようとする性向の中に見出される傲慢さにあるからである³⁴。そして、この傲慢さが自由の名の下で生命の質的要素にまでその支配領域を拡大することは、単に個人から謙虚さや共感能力が奪われるという結果だけでなく、人々の注意を世界の在り方を検討することか逸らし、社会や政治を改良しようとする意欲を弱めてしまう結果をもたらすと述べる³⁵。本来、人間は動物のように身体の一部を改造することで周囲の環境に適応する方法ではなく、道具を用い、相互に協力・連帯し合う社会を形成することで、所与の環境に適応してきた生き物である³⁶。また、人間の自由は受動を踏まえての能動として、自ら所与の環境や他者に働きかける主体的行為の中に発揮されてきたのである³⁷。更にその自由が人間の不完全性と限界に対して、より包容力のある社会体制や政治体制を創り出す努力の中で発揮されることを善として評価する歴史を刻んできた³⁸。ところが、今やその自由が、所与の環境と既存の社会体制の中で優位に立つことを目指す個人にあっては、人間的限界を身体改造によって克服しようとする衝動に拘束されてしまっている。自らの遺伝子改変による環境への適応という、本来、

30. マイケル・サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由』、66、104頁参照。

31. 同上、105頁参照。

32. 同上、93頁参照。

33. 同上、90頁、171頁参照。

34. 同上、50-52頁参照。

35. 同上、51頁、102頁参照。

36. 北原隆「1人間の由来」『現代人間学』（春秋社、2008）12頁：動物の環境への適応は主に細胞内で偶然おこる突然変異と自然淘汰の結果として生じる。言い換えれば、動物の適応は主に遺伝的なものであるのに対し、ヒトの適応は…意図的に自らが必要とするより適した状態へと「環境を整える技術」を発達させて、「人工的に適応」…してきたのである。

37. 井上英治・片山はるひ「4自由—成熟と喪失、そしてあらたな成熟」『現代人間学』（春秋社、2008）62-65頁。

38. マイケル・サンデル、前掲書、102頁参照。

動物が行ってきた適応法を採用することが人間の自由の名の下で行われていることになる。

このような現状に対して、現状に対して、サンデルが身体的エンハンスメント採用の行く手に一種の「超行為主体性 (hyperagency)」を洞察し、それを「支配への衝動」や「プロメテウスの熱望」と表現することは興味深い³⁹。すなわち、人間本性をも含めた自然のすべてを自分たちの欲求を満たすために作り直し、支配したいという衝動が、あたかも超行為主体となって人々を駆り立て、個人の行為主体性を支配していると理解できるからである。激しい競争社会を勝ち抜くための方策が、却って、従来の人間らしい資質としての「自己の在り方を自由意志によって選び取る主体としての力」を奪う結果、個人は無力化させられ、社会全体は非人間化させられてゆくという構図である。

第二章 キリスト教における「新しい人」

1. ニューエイジ運動の人間観・救済観との対比

上記のような現代の成功哲学とも呼び得る思潮の背後に、カトリック教会はニューエイジ運動を主導する様々な人物、団体の影響を察知し、信者に対する注意喚起を行ってきた。なぜなら、それらは魅力的ではあっても、かつて異端として排斥してきた思想に酷似した人間観、救済観を擁しているからである。

キリスト教は、人間は皆平等に神によってその似姿としての尊厳を備える存在として創られているという人間観を有する。同時にこの被造物との関わりについて創造主である神の側からは、たとえ人間がどのような状況に陥ろうとも、あくまでも誠実に一人ひとりの人間が生きるために必要となる働きかけを止めることはないばかりか、イエス・キリストの受難と死において人間の苦しみに連帯した神が、その復活において決定的な形でその救済意志を啓示したと信じる。従って、この神観と人間観に照らすとき人間が神から完全に独立して尚、生きられると思うことは幻想である。

しかし、近代的西洋によって形成された「個人」の自由や自律を追求する人間観は、教会権威を否定するばかりでなく、外部からのあらゆる力と介入を排除する傾向を強め、今や、宗教までもをあたかも自由に物色して回ることが可能な消費財のように見なすに至った。しかし、果たしてこうした『自己流』(do-it-yourself) のスピリチュアリティに、人間の究極的救いの問題を解決し、危機的状况から人間を救う力があるのだろうか⁴⁰。

岩本潤一の解説によれば、「ニューエイジ」は1980年代以降顕著な発展を示し、日本でもすでに種々広範な実践によって普及している⁴¹。その多くは伝統的宗教や新宗教のように

39. マイケル・サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由』、30頁、168頁参照。

40. 岩本潤一、前掲書、121頁参照。

41. 同上、111、115頁参照。

明確な教団の形をとらず、個人が自由に参加できる非宗教的な組織体であり、自己啓発セミナーやヨガ教室、人体科学会や精神医学会、NPO 法人等の形態をとる⁴²。キリスト教の立場から見た問題は、それらの諸活動団体がスピリチュアリティと呼ぶ体験が、全体の中に溶け込む感覚や宇宙の聖なる力やエネルギーと一体となる陶酔感などによって、自分が不完全で有限であるという不快感や疎外感を癒し、絶え間なく生成する世界の創造進化の過程の中に合流できるとする救済観である⁴³。その「神化」とは、人間が本来神的なものであることに目覚め、その認識を受け入れる「覚醒」体験のことであるが、そのような自己意識の変容の道を通して高められ、宇宙・神・自己の神秘に導き入れられる恩恵にあずかるのは、秘密の（エソテリックな）教えを探索した特権的な霊的「貴族階級」に限られるというのである⁴⁴。また、個人主義的な霊的上昇の探求に専念することで、苦しみや死など、有限な人間存在に必ず伴う実存的な課題を回避してしまう点も問題である⁴⁵。

一方、キリスト教的な「神化」は、人間の努力だけで実現するものではなく、上から「下降」して来る神の働きによって各人の人格の中に起こる変容であるから、ニューエイジの自己向上を目指す神化とは正反対の方向性を持つ救済論となる⁴⁶。また、非人格的な宇宙的力の問題ではなくイエス・キリストという具体的歴史的人物とのかかわりが重要であり、しかも、そのイエスの十字架死と復活という出来事によって啓示された人格神の救済意志に対する態度決定が問題となる。それは宇宙の波動やエネルギーの一致の感覚や人間的感情の癒しなどではない。逆に人間にとって絶対「他者」である神に対して「無」に過ぎない人間の不完全さや罪深さを自覚する経験を伴い、しかも、無である自分が神の目に尊い存在であることを受容し、自らの自由意志によって、無限の神の「愛」に自己を委ねる決断をする体験が必要となる。すなわち、自他の明確な区別がある上で、「『われ』から神である『汝』への脱出、すなわち回心の態度を含む⁴⁷」自己からの超越が起こる。ここにもニューエイジ思想との違いがある。

2. ニューエイジ運動がもたらす新しい世界とは

日本では西洋発のこの「ニューエイジ」なる用語に馴染みがないばかりか、その用語が意味する反キリスト教的内容にも無頓着であるため、著名な思想家や学者たちが唱導することで広く一般化される現象が起きている⁴⁸。人格神を認めないニューエイジ思想の問題点は、

42. 岩本潤一、前掲書、112-116 頁参照。

43. 教皇庁文化評議会／教皇庁諸宗教対話評議会『考察』66-67、75 頁参照。

44. 『考察』44、76、78 頁、岩本潤一、前掲書、131-132 頁参照。

45. 岩本潤一、前掲書 132-3 頁参照。

46. 同上、132 頁及び『考察』77-78 頁参照。

47. 前掲『考察』77 頁。

48. 岩本潤一、前掲書、115-116 頁参照。島蘭進氏の指摘として、河合隼雄（1928-2007）、梅原猛（1925-）、湯浅泰雄（1925-2005）各氏の名前が挙げられている。

その道徳観において、人格神の位置に宇宙の天体や永遠の秩序や調和などを据えるため、歴史的「今・ここ」における個人的責任を回避する方向へと誘導される点にある⁴⁹。この道徳的匿名性と個人的責任の拒否が罪の自覚を軽視し、神との対話的関わりの中で赦しや和解を求める贖罪の必要性を否定し、歴史内に起こったキリストの十字架の贖いによる救いの啓示を無視する心性を形成し、神やキリストの存在を自己とは無関係の存在に分類させてしまう。ニューエイジ運動の救済観は自己向上・自己進化を目指す自力救済論で自己の内面的意識変革に集中する分、外部に対する視野が狭まり、個人の社会的政治的無力化感が増幅される結果を招き、無意識のうちに以前よりも他者に操作されやすい人間にさせられてしまう危険がある⁵⁰。カトリック教会では、新しい世界観の実践を目指す結果、現実には世界が「非人間化」されることを危惧する⁵¹。

社会に起こる様々な思想の影響を受けながら人格を形成していく学生たちがモラルに関して発言する場合の決まり文句は、「価値観は人それぞれだから」という表現である。それは、多様性を善として評価する風潮の影響であって悪いことではないが、彼女たちはあたかも正統と認められる権威を持つ誰かによって教えられるべき、倫理的行動規範や価値規準などは存在しないと考えているかのようなどころがある。しかし、彼女たちは自身のそのような考え自体が、社会に流布している言説の影響下で形成された思想であることも、その思想の蔓延した社会が自分たちの未来にいかなる状況をもたらすかを吟味する規準さえ持たずに受容している事実にも気づいていない。また、多様な個々人の価値観すべてが、正当かつ健全であり、自分の好みに合う選択を行うことが、将来の幸せに到る道であると信じているふしがある。

そのため、彼女たちの価値観からすれば理想の対極に位置する最も貧しい人々の一人ひとりに心を砕き、その魂と身体の渇きに慈しみ深い愛をもって応えることに全身全霊をかけて奉仕するマザーテレサの人生は、大きな衝撃を与えるものである。しかし、神への信仰に動機づけられた行為選択をした経験のない学生たちには、マザーテレサの魅力が、人間的な力をはるかに超えた神から与えられた「聖性」という恩恵であることも、また、その恩恵と協働するためにマザーテレサ自身が払った人間的努力がいかに尊敬に値すべきものであったかについても理解されない。どこかで、マザーテレサの偉大さは、世にあふれるアスリートや著名な芸術家のように天分として与えられた資質を、その並外れた努力と訓練によって開花させた結果であると考えているからである。

確かに資質と努力と訓練は必要である。しかし、キリスト教が考える「新しい人」としての模範は、人間的努力の延長上にあるのではない⁵²。超越的次元との交流という日々の祈りを原動力として、闇に覆われた自己の心を超え出て汝であるイエスの意志に自己の意志を一

49. 岩本潤一、前掲書、120、124頁参照。

50. 同上、129頁参照。

51. 同上、130頁参照。

52. 雨宮慧、『聖書に聞く』（オリエンズ宗教研究所、2009）、220頁参照。

致させてゆく「超越」の中で「神から」与えられる恵みなのである。マザーテレサは、50年の長きに渡ってその「愛の忠実」を生きる信仰を保った。この「愛の忠実」を生きることは誰にでも開かれている道でありながら、同時に人間の自由にはならない恵みを必要とする道である。しかし、この恵みがもたらす「超越性」が本学の人格教育が理想とする人間像と巷に広がる自己啓発理論が理想とする人間像とを分ける鍵である。そこで、次に「新しい創造」（Ⅱコリント5・17）をキーワードとして、キリスト者の超越性について考察する⁵³。

3. キリスト教ヒューマニズムが目指す「新しい人」

元上智大学神学部長ペトロ・ネメシェギは本学の建学の精神が土台とするキリスト教ヒューマニズムの内容を7つの命題にまとめ、解説している⁵⁴。その中の5番目には、「『古き人間』からの脱却」という命題がある。つまり、本学教育は「新しい人」の形成を目指しているのである。そして、この「古き人間」から脱却して「新しい人間」になるための道として、氏は「他者のために生きる」という第六番目の命題を上げ、「人間は神と他の人々に向かって心を開き、神と人々を受け入れ、愛することによって真の人間になる」と語っている⁵⁵。

すなわち、キリスト教ヒューマニズムが目指す「新しい人間」とは、結論から言えば、キリストの内において、「人間を超越する神の」恩恵を、自己の内に受け入れ、この世の価値をも超越する愛の「超越性」を生きる人のことである。それは、最初の人（アダム）の創造において意図されながらも実現しなかった神の似姿としての愛を生きる人間性を、最後のアダムであるイエス・キリストにおいて啓示された姿へと変容されていく道を歩むことである。その姿に達するためにはイエス・キリストによる神の救いを受諾して神とのかわりを回復し、神がキリストによって新しく創造する業に自らを委ねる必要がある。また、人間の被造性の承認と神の業に存在のすべてを任せる絶対的信頼が必須である。また、人間はこの世界の所有者でも支配者でもなく、むしろ塵に過ぎない存在でありながらも神の霊が注がれており、この世の管理者（steward）として神の意思を行う使命が与えられていることを承認する謙虚さが求められる⁵⁶。実は、この事実の承認こそが人間の自我（エゴ）が最も嫌うことであり、創世記3章に登場する誘惑者が罫を仕掛ける部分である。他者と共存する社会を形成して生きる人間の自由は、自分以外の「他」の自由と出会う場を自己の自由の限界と認めなければならない。もし、この「他性」がもたらす自己の有限性を否定し、際限なく自己充足を追求すれば人々の間を生きる「人間」としてのいのちを生きることは出来なくなる。自

53. 兩宮慧、前掲書、200-230頁参照。以下聖書の引用箇所については省略形を用いる。

54. ペトロ・ネメシェギ著「七つの命題—キリスト教ヒューマニズム」上智大学『叡智を生きる』刊行委員会<編>『叡智を生きる 他者のために、他者とともに』（Sophia University Press、2010）45-58頁参照。

55. 同上、57頁参照。

56. 伊従信子著「謙遜」『新カトリック大事典』2巻（研究者、1998）799頁。「謙遜の基礎は信仰がはっきりと示す真理（すなわち、人間が受けたすべての善は創造主、救い主である神の愛を源としており、悪のみが人間からのものであること）を誠実に認めることにある。」

己か他者かの二者択一を迫る支配と従属の関係に陥り、やがてはいずれかの死を招き入れることになるのである。創世記3章が語る死の運命は、神が与えた罰なのではなく、人間が他者を否定し自己のエゴイズムを選択する時に起こる必然的結果と言える。雨宮慧はキリストに結ばれた者にとっての「自由」は、人に仕える自由であって自分の望みを実現する自由ではないと語る⁵⁷。

キリスト教において聖人と呼ばれる人々に見られる徳が「謙遜」にあることは、それが、神とかかわる人間の真実な態度を回復する第一段階だからである。この被造性と有限性の承認は決して人間を卑屈にするものではない。それは人間の事実の承認であり、神に出会うことが許された人間に起こる最初の反応は畏敬である。更に、神は喜んで「膝をかがめさせる」方である。雨宮慧はマザーテレサの修道名の由来であるリジューの聖テレーズの姉妹愛を説明する文章の中で、聖女が姉妹の中に「膝をかがめさせる方=イエス」を見ていたことを語る⁵⁸。マザーテレサが貧しい人々の中に十字架上の主イエスを見ていたがゆえに、主に仕えるのと同様の敬意をもって貧しい人々と関わっていたと言われることも、同様に説明できる。

聖パウロの言葉によれば死者の中から復活したイエス・キリストとの出会いは、この世のあらゆる価値を凌駕する絶大の喜びである⁵⁹。その体験が与える希望は、自我（エゴ）の欲求実現に固執する「古い人間」を脱ぎ捨て、キリストの内に神と人への愛を生きる「新しい生命」に造り変えられることに身を委ねさせる力であり、世のあらゆる苦難をキリストの受難と死に与るものとして受諾させる推進力となるのである⁶⁰。

教皇ベネディクト 16 世は、パウロの回心の出来事を「新しい誕生」として解説する。

「このパウロの人生の転換、すなわちパウロの存在全体の変容は、心理的過程の結果でも、知的・道徳的な成熟ないし進展の結果でもありません。むしろそれは、外から、(中略)、キリスト・イエスとの出会いからもたらされたのです。(中略) それは単なる回心でも、パウロの『自我』の成熟でもなく、自分自身の死と復活でした。パウロという存在は死に、復活したキリストとともに新しい存在が生まれたのです。」⁶¹

57. 雨宮慧、前掲書、164頁参照。

58. 同上、38-40頁「国語辞典で『へりくだる』を引くと『相手を敬う気持ちから自分を低くすること』とある。聖書が述べる『へりくだる』も同じであろうが、だれを『相手』とするかはまったく異なっている。我々は人間仲間を『相手』と考えるだろうが、聖書の考える『相手』とはキリストを通して我々を罪から解放した神なのである。」とある。

59. フィリ3・8-11参照。

60. ロマ8:18-30、Ⅱコリ3:18参照。

61. 教皇ベネディクト 16 世著／カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳『聖パウロ』、36頁。

第三章 マザーテレサにおける「新しい人」の人間らしさ

1. 人間論的刷新としての「新しい創造」

「新しい創造 (καινή κτίσις)」というモチーフは、新約聖書ではⅡコリ 5:17 とガラテヤ 6:15 にのみ、しかもこの二語の組み合わせでのみ見出される⁶²。雨宮は「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです (εἴ τις ἐν Χριστῷ, καινή κτίσις)」(Ⅱコリ 5:17) について次のように解説する。この文の直訳は「だれかがキリストの中にあれば、新しい『クティシス』」である⁶³。この「クティシス (κτίσις)」は「創造の業そのもの」と「創造の結果生じた被造物」の両方に訳すことができるが、新共同訳は後者を取り「新しく創造された者なのです」と訳す。一方、雨宮は前者の意味にとり、神の創造の業に強調点を置いて「だれかがキリストとの密接な関わりの中に入るとき、神による新しい創造の業が起こっている」と訳す⁶⁴。

律法による自分の義 (自己義認) を追求していたパウロにとっては、義とは全く反対の不義のシンボルでさえあった「木にかけられた」イエスの中で起こった神の救いの業の啓示は、彼の神概念を完全に覆す衝撃であった。しかし、ユダヤ教の理解では、「神に呪われた者」であったはずのイエスに起こった変容は、この世の基準や人間的状況とは全く関係のないところで「神が与える」恵みの啓示であった。聖書における「世」は「真の神と関わりのない状態」を表すが⁶⁵、キリストにおける死からの復活という変容は、神と関わりのない世の只中に神の恵みが一方的に介入してきた出来事なのである。

パウロが「キリストの中に (ἐν Χριστῷ)」を使う時は、人間の律法に基づく義とは関わりなく、むしろ、人間的な基準をはるかに超越した神の愛を前提にしているのであり、キリストを人間と神性の接点として考え、その「キリストの中に (ἐν Χριστῷ)」神が働くことを言おうとしている⁶⁶。パウロが理解した救いの使信は、キリストと結ばれる人々の中でキリストの復活が行われるということであり、我々は神によって変えられるということである⁶⁷。従って、キリスト教の救いは「この世」を離れて「あの世」へ逃避することでもなければ、宇宙に溶け込むことでもない。むしろ、キリストの中で新しく創造された人としてこの世を生きることである⁶⁸。従って、キリスト者の超越性は世界を超えた領域に入ることで超人になることでもなく、この現実社会の中にもありながらも「世」の原理とは別の、つまり「イエス・キリストに結ばれて」という原理で生きることである⁶⁹。

62. 荒井献・H.J. マルクス監修『ギリシア語新約聖書釈義辞典Ⅱ』(教文館、1994) 280頁。

63. 雨宮慧、前掲書、161頁。

64. 同上、前掲書、161頁。

65. 同上、213頁。

66. 同上、160頁参照。

67. Ⅱコリ 3:18。

68. 雨宮慧、前掲書、161頁参照。

69. 同上、208-9頁参照。

2. マザーテレサに見る変容

ジョゼフ・ラングフォードは、人々がマザーテレサに引き寄せられる訳は、彼女が平和に包まれ、神に満たされた別の次元を生きているように見えたからであると語る⁷⁰。マザーの顔の輝きや目に溢れる愛は、彼女の心のうちに住まわれる神の力と美と魅力の証しであり、人間の目を通して輝く神の愛のまなごしの現れであった⁷¹。そして、マザーテレサの中に住む神の現存に触れた人々は、あまりにも自己中心的な人々の多いこの世界の中に、マザーの存在と共に神とその善良さが、すべてを突破して入ってこられたことを体験するのだと言う⁷²。

ラングフォードはその神の現存を「聖性」と呼ぶ⁷³。また、1946年に36歳で第二の召命を受ける時まで「普通」の修道女であったシスターテレサが、20世紀の聖女と呼ばれるマザーテレサに変容していった過程に、人の中に住まう神の威光と力の現われとしての聖性を見る⁷⁴。そして、マザーテレサの非凡な特性がすべて神からのたまものであり、そのたまものを最大限に育てることに協力したことも、彼女から生じたのではない恵みであったと説明する一方で、その特別な恵みを受けたことがマザーテレサが特別であるということの意味しているのではないと言う⁷⁵。むしろ、1946年の啓示に出会うまでの「平凡」なシスターテレサがマザーテレサに変容したことは、神の特別な賜物は人間的に偉大なものに対する報いでもなければ、蓄えられているものでもないことを示していると語る。すべては神からの恵みであり、マザーテレサでさえ自分だけで自分を超越することはできず、わたしたちを創り、わたしたちを超越しておられる方によってのみ、わたしたちは変えられ、高く引き上げられるのであると述べる⁷⁶。

すなわち、ラングフォードは、マザーテレサにおける変容は、人間を超越している神が人間の内に住むという人間の最高の価値を示し、その人間性が完全に開花する聖性への招きが、すべての人に与えられていることを示しているのであると言う⁷⁷。このような人間に「受肉した」変容力の恵みを証しするために、マザーテレサのような聖人が現代という時代に与えられているのである⁷⁸。

3. マザーテレサに見る「新しい人」

ラングフォードは「聖性」が、「人間性の最高の尊厳と、(中略)人が到達できる高さを示

70. ジョゼフ・ラングフォード著／里見貞代訳『マザーテレサの秘められた炎』（女子パウロ会、2011）213頁参照。

71. 同上、216頁参照。

72. 同上、212頁参照。

73. 同上、215頁。

74. 同上、215頁参照。

75. 同上、215頁参照。

76. 同上、224頁参照。

77. 同上、189-191頁参照。

78. 同上、217頁参照。

している」と言う⁷⁹。また、「キリスト教の伝統によれば、魂における神の変容のプロセスを動かし、力を発揮させるのは、祈りのうちに神の偉大さを眺める観想である」⁸⁰と述べる。変容を受けたマザーテレサがシスターたちに勧めるのも祈りである。しかも、心の沈黙の中で、一人ひとりの愛の応答に渴くイエスの声を聴くようにと勧める。

『わたしは渴く、わたしは渴く』という声を聞くようにしなさい。
イエスがあなたの心に語られるのを聞くようにしなさい⁸¹。』

「日常、イエスと親しく触れ合うことをあきらめてはいけません。私が言っているイエスとは実際に生きている存在としてのイエスであって、頭で想像するイエスではありません。『あなたを愛しています』というイエスの言葉を聞くことなしに、一日を終えることができるのでしょうか。いいえ、できません。身体が呼吸を必要とするように、私たちの魂はその言葉を必要としているのです。…（中略）…イエスはあなた方一人ひとりに、耳を傾けてくれることを求めています。あの方は、あなたの心の静けさの中で語りかけているのです⁸²。』

「次のことをよく覚えておきなさい。『わたしは渴く』というのは、イエスが『わたしはあなたを愛しています』と言われるより、もっとずっと深いことです。心の深いところで、イエスがあなたに渴いておられると知るまで、あなたにとってイエスが誰であるか、あるいは、イエスがあなたにどういう人になってほしいかを知るようにはならないでしょう⁸³。』

マザーテレサはシスターたちに仕事のさ中にあっても「世界の心の中で観想的」になるよう勧めていた⁸⁴。ただし、ラングフォードによれば、マザーの教えを理解するためには、その中核にある「心の祈り」と「内面の静寂」を知る必要がある⁸⁵。「心で」祈るということは祈りの深さについてであり、感覚的感情ではなく存在の中心からという意味である⁸⁶。聖書的には心は人間の内的神殿であり、人と神が出会う場のことであるから、心で祈るとは人間の存在の中心に住まわれる神を見出すために、表面的意識の下の深いレベルへ降りるこ

79. ジョゼフ・ラングフォード、前掲書、216頁。

80. 同上、225頁。

81. 同上、230頁。注93：Mother Teresa's Instructions to the M.C.Sisters (February1994)

82. 五十嵐薫著『マザーテレサの真実—なぜ、「神の愛の宣教者会」をつくったのか—』（PHP研究所、2007）198頁。

83. ジョゼフ・ラングフォード、前掲書、387頁。M.Cのシスターたちへの書簡（1993年3月25日）

84. 同上、247頁参照。注109：Mother Teresa's Instructions to the M.C. Sisters (November,20,1979)。

85. 同上、252頁参照。

86. 同上、253頁参照。

とを意味する⁸⁷。

マザーテレサは「わたしたちの心の最も深い聖所で、イエスと一人きりで生きる努力をする」ように勧めている⁸⁸。また、人間の内面に、神以外の何者も入れない内的聖所を創る必要があると語る⁸⁹。この「心の場」を見出すことは祈りの出発点である⁹⁰。わたしたちはどんなに努力をしても、自分で自分を変えることはできないが、愛である方によって力強く愛されることによって変えられることができる。忙しい生活を中断して自己の内面に降りてゆく祈りの時間をとるならば、神の無限の愛に近づき、生活の中で変容の効果を体験するだろう。マザーテレサの変容は祈りを通して行われたことが、「わたしの秘訣は単純です―祈るのです」という彼女の言葉に示されている⁹¹。

しかし、この孤独と沈黙の中で、神との出会いが恵まれるまで忍耐をもって祈ることは、スピードや効率の良さを追求する現代人にとっては最も困難な作業となるのかもしれない。しかも、マザーテレサのようにその存在から神の現存の印があふれ出るまでになることは、どれほど深い祈りと信仰の確信を必要とすることだろう。

Ⅲ. 結論 マザーテレサに見る「新しい人」の人間らしさ

マザーテレサにおいて見出される「新しい人」の姿は、キリストに結ばれた信仰者に起こる神の変容の最終ゴールを示していると言えよう。それは、「神が愛するように愛すること」に到達した人間の尊厳の最高の姿であり、祈りによって内的深さを生きる人が到達する「神と一致」した姿である。マザーテレサは、キリスト教ヒューマニズムが理想とする「愛において超越する神と一致する新しい人」の姿である。その理想は、決して神なしに達成されるものではないが、この理想像が提示されていることの意義を重視したいと考える。

過去にさかのぼってキリスト教の歴史を見れば、確かに、目を覆いたくなる事実が多く確認され、神の存在を否定したくなる気持ちも理解できる。しかし、神を見失った世界に後から生まれてきた若者たちの中に、他者と共有できる基準や規範さえ教えられていないために、「自我」さえ見失いがちな状態に置かれている人々が目立つ。

筑波大学教授土井隆義が指摘する通り、この現象は社会から公共徳とと呼ばれる価値が失われ、学校では多様性を重視する教育の下で他者と共有できる基準が失われているため、自己を形成するための枠組みが無く、しかも、自分の内面に安定した基準も出来上がっていない

87. ジョゼフ・ラングフォード、前掲書、253-4頁参照。

88. 同上、258頁参照。注115：Spiritual Directory of the Missionaries of Charity Sisters。

89. 同上、258頁参照。

90. 同上、259頁参照。

91. 同上、241頁参照。

いために、複雑かつ多様な相手に適応させる核となる自我が未成熟なまま放置された若者像を示しているのであろう⁹²。かつては、社会に本音と建前がありながらも本人は自己の本音を知っていた。また、心理学的に「イド」と「スーパー・エゴ」を調整する自己中心的・自己防衛的な「エゴ」と説明される自我が自覚されていた。そして、他者との出会いを通して、「エゴ」と「エゴ」のぶつかり合いを経験する中で、他者との関係を尊重するならば、「エゴ」を乗り越えなければならないことに気付く「セルフ」を自覚することができたのであろう。しかし、今は、かつての「スーパー・エゴ」とされる社会規範や親の圧力がくるくると変わるために、「エゴ」さえもが築けず、「イド」を表出させないための装置として、ミラーボールのように変化させる「キャラ」を演じるしかないというのである。

執筆者は、このような宗教性が失われた社会において、超越的存在と結ばれた軸を自己の内に内面化する作業を経ていない若者たちの心に、サンデル氏が指摘するところの「プロメテウスの熱望」という一種の超行為主体性 (hyperagency) が入りこむことを危惧する。神という本来人間が主体性を確立していく上で対峙すべき絶対他者としての存在が人間の意識から失われたために、その場に「支配への衝動」が居座る格好になっているのを見る思いである。

現在、社会にはニューエイジ運動の影響から、多種多様な手法を取り入れた疑似宗教団体が存在する。いずれも修養・修行のための期間を、指導者への信頼と従順の下で過ごす必要がある。もし、自我の確立していない段階で、プロメテウスの熱望を持った指導者への従順を強いられる状態に自分を置いてしまえば、キリスト教がそこから脱して「新しい人」へと変容されるべきと教えるところの「古い自分」を強化する修行を施すことになるのではないだろうか。執筆者が、マザーテレサを模範とする人間像によって、キリスト教的宗教心の涵養を、本学教育の中に回復する必要があると考える理由はそこにある。

キリスト教の名を冠する宗教団体も様々あり、宗教指導者の主張も時代と共に変わる。しかし、イエスの神が現代人に与えた自己紹介文と自身との交流へと人々を招く呼びかけは、聖人たちの生きた証しを伴って古代から連綿と受け継がれている。神との出会いによって自己の内面から決定的に変えられたマザーテレサの姿は、世の宗教指導者たちの言説の真実性を吟味する試金石となるであろう。そのメッセージは、神が一人ひとりの人間を神が創られた「その姿のまま」愛しており、また、その人間からの愛の応答に渴いていること、しかも、わたしたち人間自身もまた神の愛との出会いに渴いており、その神の愛との出会いを望むならば、魂の深みに住まわれる生きた神との出会いと対話に自己を開く必要があること、更に、現実に神の愛を生きる人に変容されることを望むならば、社会の中で最も弱く、貧しく、孤独な人々の中で、わたしたち人間の愛を待っている神との出会いのために「自己」から出て、

92. 土井隆義『キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像—』(岩波ブックレット 759) 岩波書店、2009、20-23 頁参照。

「他者のために、他者と共に」生きる一步を踏み出す必要があることを伝えている。

マザーテレサに見る「新しい人」の人間らしさは、本学「人間学」が提示しているキリスト教ヒューマニズムの理想に一致する。それは、創造主である神と人間の被造性の受容、その神との関係回復と交流によって、心の内奥に神が宿るという人間の尊厳を生き、神の愛に一致して他者を愛するイエス・キリストという「イマゴ・デイ」の姿に成長するまで、キリストの内に、「他者のために、他者と共に」生きることを選びつつけることである。

参考文献

- 兩宮慧『聖書に聞く』オリエンズ宗教研究所、2009
- 荒井献・H.J. マルクス監修『ギリシア語新約聖書釈義辞典Ⅱ』教文館、1994
- 五十嵐薫著『マザーテレサの真実—なぜ、「神の愛の宣教教会」をつくったのか—』PHP 研究所、2007
- 岩本潤一訳・著『現代カトリシズムの公共性』知泉書館、2012
- エーリッヒ・フロム著／鈴木晶訳『愛すること』紀伊国屋書店、1991
- 教皇庁文化評議会／教皇庁諸宗教対話評議会『ニューエイジについてのキリスト教的考察』カトリック中央協議会、2007
- 上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典 2 巻』研究社、1998
- 上智大学『叡智を生きる』刊行委員会＜編＞『叡智を生きる 他者のために、他者とともに』Sophia University Press、2010
- ジョゼフ・ラングフォード著／里見貞代訳『マザーテレサの秘められた炎』女子パウロ会、2011
- 土井隆義著『キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像—』岩波書店、2009
- ハイメ・カスタニエダ＋井上英治編『新人間学』透土社、1993
- ハイメ・カスタニエダ／井上英治編『現代人間学』春秋社、2008
- マイケル・サンデル著／NHK『『ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業』早川書房、2010
- マイケル・サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由—遺伝子操作とエンハンスメントの倫理—』ナカニシヤ出版、2010
- 水草修治著『ニューエイジの罭』CLC 出版、2009
- 森一弘著『人が壊されていく—日本社会と人のありようを考える—』女子パウロ会、2009

参考サイト他

NHK クローズアップ現代「胎児エコー検査 進歩の波紋(NO.2980)」2010年12月14日(火)

放送 http://cgi4.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail.cgi?content_id=2980

名越康文「生身の患者と仮面の医療者：一現代医療の統合不全症状について― [第4-5回

スピリチュアル・ブーム (1) (2)]『週刊医学界新聞』第2739号2007年7月9日第

2743号2007年8月6日 http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA02739_03

(2012年12月4閲覧)

日本産科婦人科学会

声明「新たな手法を用いた出生前遺伝学的検査について」[http://www.jsog.or.jp/statement/](http://www.jsog.or.jp/statement/statement-shussyouzenshindan_120901.html)

[statement-shussyouzenshindan_120901.html](http://www.jsog.or.jp/statement/statement-shussyouzenshindan_120901.html) (2013年1月10閲覧)

「『母体血を用いた新しい出生前遺伝学的検査』指針(案)に関するご意見の募集について」

http://www.jsog.or.jp/news/html/announce_20121217.html (2013年1月10閲覧)

朝日新聞(朝刊)「新型出生前診断、年内に指針」2012年10月3日

朝日新聞(朝刊)「命めぐる技術どう付き合う―出生前診断 iPS細胞―」(高久潤)、2012

年11月5日